



鶴岡市/月山

謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします
本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます



Cradle 1

「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2017 January/February
平成29年1月1日発行(隔月奇数月発行)第7巻3号(通巻39号)

発行/ Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株式会社 出羽庄内地域デザイン) 電話0236(64)0888
制作/ Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-31(コアック・クリエイティブ・ラボ) 電話0234(41)0012

美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
庄内の
古伊万里を訪ねて
庄内憧憬
青柳 恵介 古美術評論家

「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

1

2017 January/February
TAKE FREE
NO.39



骨董屋さんをのぞくと、
その土地の文化や歴史が垣間見える。
庄内、おそるべし。

庄内に故郷を持つ人は幸せである。旅人がたまに庄内を訪れて、海や山を眺め、そして土地の人々の温かい言葉を聞き、不思議ななつかしさを感ずるのであるから。もし自分の祖父や祖母が迎えてくれたなら、どれほど幸せであることか。

私はかつて鶴岡の骨董屋さんを何軒か回って、取材をしたことがあった。骨董屋さんをのぞくと、その土地の文化や歴史が垣間見える。と言っても、もう最近の経済動向、情報化社会にあつては、どこもひとしなみになり、土地の個性も薄らいで来てはいるのだが、まだ鶴岡にはその残照が感じられたのである。

私は好みの伊万里の器を買い集め、食卓にそれらを並べ、それを求めた土地の風景を回想したり、時には器を新聞紙でくるんでくれ

た骨董屋の親父さんの顔などを思い出したりしながら食事をするのが趣味である。我が家の食卓にあつて、鶴岡で求めた伊万里の器は格別に輝いている（これは決してお世辞ではありません）。

鶴岡の骨董屋さんを回って、私はあらためてここが北前船の文化が及んだ地であることに気付かされた。肥沃な庄内の産物を持った豊かな経済の力と、人々の生活水準の高さによって、豊かでレベルの高い伊万里の器が庄内に残っているという事実に至った。高度経済成長期、たくさんの初期伊万里の中皿が新潟から東京の骨董屋に運ばれたというのは、今となっては語り草であるし、北前船は帰りに売れ残った商品を佐渡島で安く売りさばいていたらしいなどという話も聞いたことがある。規格外のもの、当時としては不出

来であつたらうけれど、今となつてはかえって面白い器は、佐渡から出たものが多いのである。鶴岡の骨董屋さんには、ちよつと

他所で見ないような洒落た伊万里の器がちらほら並んでいた。伊万里がそうなら、茶道具も同じことが言えるだろう。庄内、おそるべし。

庄内の冬は厳しい。致道博物館に陳列されている、蓑やカンジキ、あるいはユタンポなどを見ていると、吹雪の音が聞こえてくるようだ。海も荒れる日が多いだろう。庄内の文化は、厳しい冬に立ち向かうところに力の根源があつたのだらうと思う。降りしきる雪の夜、火のまわりに人々が集まり、時に鍋を囲む。その際、用いた伊万里の赤絵のナマス皿はどれほど人々の目を楽しませただろう。器はさまざま記憶を宿している。



撮影協力=新古美術 助川(鶴岡市)

あやぎ・けいすけ／1950年東京生まれ。成城大学大学院博士課程満期退学(国文学専攻)。成城学園教育研究所 成城大学・東京海洋大学講師を定年退職後、古美術評論家として文筆業を続ける。著書に『骨董屋という仕事(平凡社)』『風の男(白洲次郎)』『柳孝(骨董一代)(新潮社)』など。

特集

庄内の 古伊万里を 訪ねて

肥前の国、伊万里の漆から

津々浦々に運ばれた「伊万里焼」。

江戸時代に作られたものは

「古伊万里」と称され、骨董的、歴史的に
価値あるものとされてきました。

「古伊万里を探すなら鶴岡へ」と

伝え聞いたのはいつだったか――。

器がその地域の趣向を表すなら、

古伊万里には、庄内好み、といえる

美意識や感性が映っているはずですよ。



江戸から明治の伊万里



トビラ撮影協力 = 古民芸 桔梗屋
参考 = 松浦潤著「日本のやきもの【鑑賞と鑑定】第四巻 古伊万里」(1999・双葉社) / 北春千代、鈴田由紀夫、矢部良明編著「やきもの名鑑[4] 色絵磁器」(1999・講談社)
佐賀県立九州陶磁文化館監修、鈴田由紀夫、西日本新聞社事業局編「古伊万里のすべて」(2001・西日本新聞社) 他

日本初の磁器として、江戸時代を彩った古伊万里。豪商として名を馳せた酒田の本間家にも、多様な器が受け継がれていました。

北前船が運んだ新しい時代の器

本間美術館館長
田中章夫さんに聞く



色絵鳳凰草花文八角鉢



染付山水帆船舟文中皿



古九谷様式

1640-1680
伊万里焼の初期の色絵。赤緑紫黄青の五彩を使った色絵古九谷、黄緑青など表現した青手古九谷など。青手は全面を塗りこめた斬新で大胆なデザインが特徴。染付のものは藍九谷という。



柿右衛門様式

1665-1690
濁手(にごし)でいわゆるやわらかな白の磁肌、そこに調和する美しい色絵。ヨーロッパに高級品として輸出され、デザインも技術も目覚ましく洗練されていった。伊万里焼としては完成期に近い。



色絵菊唐草文皿
沈香壺



のちの古伊万里

江戸末期、社会の経済状況が厳しくなると、産業は停滞の一途をたどり、世界的に高い価値を得た古伊万里も、徐々にその華やかさを失っていった。しかし、この時代の隆盛と共に培われた技術や美意識は淘汰されることなく、伝統の意匠を誇りに、新たな伊万里焼として、今に伝えられている。

なると、肥前(現佐賀県)の有田で発見された陶石を原料に、朝鮮の陶工の技術によって磁器が誕生します。その日本初の磁器が伊万里焼です。「有田で焼かれたものの積み出しが伊万里港だったために伊万里焼という名称で呼ばれるようになったようです」。現代では有田焼の名で知られています。その中でも、江戸時代につくられたものを古伊万里と称しています。古伊万里は、藍色で草花や鳥を描いた染付が特徴的な「初期伊万里」に始まり、時代と共に彩色を施した色絵の技法が発達。「古九谷」「柿右衛門」「金欄手」など多彩な様式が生み出されました。

おもてなしの心を古伊万里に添えて

「本間家には、輸出向けに生産された柿右衛門や金欄手に近い様式が伝わっています。来客も多かったでしょうから、本間家の趣味というよりもお客様の好みに合わせて流行であった古伊万里の器を用意して、もてなしの場を設けたのではないのでしょうか」。文芸や絵画、料理が発達し、文化が爛熟した江戸時代後期は、酒田でも料亭文化

湊町文化を潤した古伊万里の様式美

大名家からの拝領品をはじめ、絵画や古美術品など本間家寄贈の品々を多く有する本間美術館。ここには、日本各地の古陶磁器も多く収蔵されています。江戸時代に作られた「古伊万里」もその一つ。日本の南方、肥前の国で誕生した古伊万里が、なぜこの庄内の地に受け継がれているのか、館長の田中章夫さんにお聞きしました。

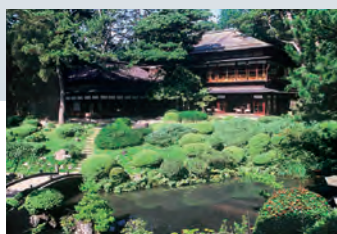
「河村瑞賢により、酒田を起点に西廻り航路が整備された1672年頃は、ちょうど古伊万里が隆盛を誇った時代。酒田の亀ヶ崎城跡でも色絵の陶片が発掘されていますから、北前船の交易により湊町として繁栄した時代に、豪商や豪農、武家のもとへ古伊万里が入ってきたのでしよう。商人町でしたから、生活の中でも華やかな器を使ったと考えられます」。

そもそも日本の「やきもの」の歴史は、土物といわれる粘土を原料とした土器、陶器、炆器に始まりました。それが1610年代に、その後、中国窯場の復活以降は、古伊万里の輸出は減少。18世紀中頃からは国内向けの染付の椀、皿、そば猪口など庶民向けの磁器が量産化され、日本津々浦々に普及していきました。

時を経てもお、古伊万里に魅かれる人々は少なくありません。「多彩な様式美は古伊万里の魅力。この料理にはこの大皿といった具合に器として楽しむことで、陶工の思いや発想の豊かさを深く味わうことができるのかもしれない」。取材・文：土門かおり

本間美術館

昭和22年、戦後の荒廃した人々の心を励まし、芸術文化の向上に資することを目的に、日本一の大地主として知られた本間家が開設した私設美術館。古美術から現代美術までさまざまな企画展を行っている。また、庄内藩主酒井家の領内巡見の休憩所として利用された別荘(本館)「清遠閣」では、陶磁器や茶器などの収蔵品を常設展示。本間氏別邸庭園(鶴舞園)は国指定名勝。



【住】酒田市御成町7-7
【開】9:00-16:30(11月-3月、入館は30分前まで)
【休】火・水曜(12-2月)、展示替え日、年末年始
【問】☎0234-24-4311



食器、人形、布類、工芸品…
タイムスリップしたかのような
雰囲気漂う鶴岡の骨董屋さんで
古伊万里について伺いました。

普段づかいの 器を自分用に

— 池田和歌子さん

全国各地から 古伊万里を求めて

鶴岡の料亭文化の名残を今に伝える七日町。池徳古美術店はその通りで昭和20年代後半から続く骨董屋です。昔ながらの風情を残す店内には、江戸時代の古伊万里から明治大正昭和期の小皿まで、多種多様な器が並んでいます。店主の池田和歌子さんに伺いました。

「古伊万里の中でもうちは普段づかい用の食器が多いので、皆さん自分で使うなだって買っていていけます。特に震災の年にテレビに出

てからは（平成23年8月放映NHKBS『温故希林〜樹木希林の骨董珍道中〜』、太平洋側の方々が家の食器みな割れたってたくさんいらっしやって、こういうな家さあつたって、懐かしがって買っ行って行きました。伊万里は日本海側の港に入って太平洋側さ広まったから、今も扱っているお店はこっち側が多いんじゃないの」。

かつて北前船で酒田港や加茂港へ届いたやきものは、最上川舟運や陸路を通して人々に行き渡り、暮らしの中で愛用されてきました。「昔はお膳でお客さん呼んだでしょ



(上) 花唐草と環状松竹梅の八寸皿
(中) 染付蛸唐草の付出皿
(下) 錦手のなます鉢

それも全部伊万里でしたっけ。床の間さ飾るなも伊万里の大皿で。それさ釣ってきたクロダイを乗せて品評会して魚拓とったりしたから、釣りする人は大抵大きいのを

15年前に三代目のご主人が他界し、一人でお店を営む池田和歌子さん。毎月6日は鶴岡市の大督寺で鶴岡六日会(オークション)を主催。



持っていましたよ」と池田さん。その後、高度経済成長期を迎え、生活様式が変わる中、各家庭で眠っていた古伊万里は市内各地の道具屋などへ。鶴岡はその豊富さと質の高さが評判となり、一時は「古伊万里を探すなら鶴岡へ」と、全国から業者が訪れたといえます。「その頃に、初期伊万里など高価なもののはほとんど出てしまっただけでも、今も持ち主や子どもさんから声がかかって家さ買付に行く」と、古伊万里がどつと出てくる時があります。それに、古伊万里の器だあって気づかないで使っている家

もけっこうあると思いますの」。

**変わらぬお店で
昔の良きものを**

今から60年前に池田家へ嫁ぎ、初代の手伝いを始めて以来、「最初は好きでなかった」というこの世界で生きてきた池田さん。次第に古き良き道具の奥深さと技に魅せられ、この仕事が楽しくなると話します。「昔はこの通りだけでも道具屋が3〜4軒ありましたけど、今はめっきり減りました。でも古伊万里もそうですが、昔の道具は面白いものがたくさんあるし、

お客さんとの世間話も勉強になりますの。お店やめんなよってみんなに言われながら、まずは楽しくやっています。丹精込めて作られて一時の眠りについたものを、大切にする人に新たに手渡していく。池徳には、懐かしさと愛しさを感じさせる出会いがありました。

池徳古美術店

女主人が営む老舗



[住] 鶴岡市本町2丁目14-20
[開] 9:00~17:00
[休] 不定休
[問] ☎0235-22-0881



鶴岡市生まれ。30歳の時から骨董収集を始め、平成2年に帰郷。脱サラして平成23年に自宅兼店舗「桔梗屋」を開業。

も丁寧な筆使いで図柄が描きこまれ、まず見飽きることがありません。「古伊万里には時代を感じさせるロマンがあります。時代背景が映り、江戸のセンスが垣間見え



(上) 染付の濃淡と総柄が美しい牡丹唐草文大鉢。
(中) なます皿3種は右上から時計回りに、花唐草、コレクター人気の高い波兔文、桜流水文の図柄。
(下) 元禄から享保期の赤が美しい染錦花鳥文尺皿。いずれも江戸中期～後期製、一部非売品。



素朴かつ上品、芸術的で庶民的。見て、使って楽しい骨董の醍醐味をよく知る店主が集めた古伊万里の穴場があります。

時間を旅する器と出会う場所

— 佐藤 重昭さん

古き良きものに磨かれた慧眼

住宅街の一軒家、古伊万里を目当てに訪れた人たちが目を見張るそのコレクションは、店主の佐藤重昭さんが「好きこそ物の上手」で目利きを磨き、集めたものです。佐藤さんが骨董に目覚めたのは30年前。会社員時代に転勤した大阪で、歴史にまつわる資料館や博物館などを訪ね歩くうち、古いものの趣に惹かれていきました。やがて百貨店の古陶磁展や、近所や旅先の骨董市に足を運ぶようにな

り、自分の手元に品物を置く楽しみが増していきます。佐藤さんは主に焼き物を好み、古伊万里もその一つとして集め始めました。「26年前に帰郷してはじめて、庄内の骨董屋や骨董市には古伊万里が多く出ることを知りました」。佐藤さんは徐々に古伊万里に傾倒、地元の骨董屋さんに教わりながら、独自の審美眼を身につけていきます。そして平成23年、古伊万里を中心に古民具を扱う「桔梗屋」を開店。自宅を兼ねた店内には、染付から色絵まで、さまざまな意匠の古伊万里が並んでいます。どれ

る。その器を通して自分の世界を広げることができるんです」。佐藤さんが最も好むのは江戸中期、18世紀頃のもの。「古伊万里が大

用の美を愛でる300年前の器

量生産化される過渡期のものは、素朴な味わいが残っています。温かみのあるコンニャク印判や、古伊万里を代表する蛸唐草や花唐草といった文様など、暮らしの器としての彩りと、芸術品としての品格を持ち合わせたものが目を引きます。桔梗屋のコレクションは、上手から「くらわんか」のような雑器まで幅広く揃い、どれも古格を感じる品格を持っています。

佐藤さんは、お客様との対話を大切にしたいとインターネットでの販売は行わず、地元や近県の骨董市への出店以外は、店頭販売を基本としています。「全国からお客様が見えられます。うちでは高級品はあまり扱っていませんが、中間的な器が多いので、多様な古伊万里が見られるということでは穴場なのかもしれません」。

時代を語り、作り手の息吹を伝える古き器たち。佐藤さんはその魅力をこう語ります。「古いものが好きで、刺し子や刀剣、古民具などさまざま興味を持ちましたが、やっぱり古伊万里に戻ってきました。30年見続けていても飽きない。時代を感じさせるのに、いつの時代にもなじむ、その味わいに惹かれるんでしょうね」。



[住] 鶴岡市桜新町6-11
[開] 10:00~18:00
[休] 不定休・完全予約制
[問] ☎0235-22-8652
※来店時は予めお電話を

古民芸・桔梗屋

住宅街の骨董屋





鶴岡の街中にある「ミルク」は、陶器も愉しめる喫茶店。併設された我楽多蔵には古伊万里コレクションが並びます。

街の小さな古伊万里ギャラリー

— 中村修さん

庄内にある古伊万里の数々

「昔はやきものを船に乗せて酒田や加茂の港まで持ってきたわけだけど、全国的に見ると庄内地方の荷揚げが特に多いわけではないです。じゃあなんで古伊万里を探すなら鶴岡へ」と言われたかという、それは庄内が豊かで質の高いものがあつたから。そしてそれが余所に出回らず残っていたからだと思います」と話すのはマスターの中村修さん。若い頃からやきものが好きで、東京に住んでいた頃

から骨董店をのぞいていたそうです。鶴岡に戻り、昭和57年に喫茶店を始めてからは市内の道具屋さんに通い、古伊万里を買い求めてきました。「あの頃は池徳さんにも随分通ったし、今は閉じてしまっただけ山王通りにあつた加賀屋さんからもお世話になりました。初期伊万里なんかこの辺の土蔵にたくさんあつたみたいです」。初期伊万里とは、日本初の磁器が佐賀県有田で誕生した江戸初期頃のもの。未完成で素朴な味わい的人气を集め、中村さんもその徳利や皿などを所有しています。他



(上) 雪の結晶を模した雪輪文様が縁に刻まれた柿右衛門の白磁。
(中) 睡壺ともいわれる盃と盃台。
(下) どちらも江戸元禄期頃の柿右衛門様式の菊形皿だが、よく見ると地肌が異なる。

にも中村さんのコレクションには、江戸時代の雑貨くらわんか皿や藍古九谷、藍柿右衛門と呼ばれているものなどがあり、それらの一部が喫茶店奥のギャラリー「我楽多

喫茶店」ミルクのマスター・中村修さん。店に併設された「我楽多蔵」では現代陶器を販売しています。古伊万里は展示のみです。



蔵」を始め、店の食器棚や壁面などに陳列され、珈琲の香りと共に訪れる人々の眼を愉しませていきます。「うちにある古伊万里は、すべて地元で手に入れたものです。我楽多蔵を始めた頃は、骨董市を庄内神社やお山王さんでもやっていて、古伊万里がいっぱい並んでいました。時代的に古くない江戸後期のもので、徳利の長い首が曲がって下にくっついているものとか、本当に面白いのが出てきましたね。全国から業者さんが週に何度も通ってきて、その都度抱えきれないほど持ち帰ったという話も

よく聞きました」。都から遠く離れた地の豊かな道具の世界

一方で、庄内が骨董の世界で注目されてきたのは古伊万里に限らないと中村さんは話します。庄内さしこ、ばんどり、庄内かつぎ、裂織り、船筆筒、庄内筆筒、藍染め、黒柿細工など、暮らしの中で生まれたさまざまなものが地域に残されてきました。「庄内は陸の孤島だったのが良かったんだと思います。どこに行っても同じようなものが並ぶ今と違って、昔は地



[住] 鶴岡市切添町20-24
[開] 9:00~19:00
[休] 木曜
[問] ☎0235-24-8730

MILK. 我楽多蔵

古伊万里のある喫茶店



庄内写真季行

28

月山・8合目

根雪になる前に、食料と暖を取る薪を
山小屋に荷上げた。月山の森林限界、
霧氷のブナ林を撮るために。

冬の終わり頃、機材を背負ってスキで山小屋に向かい、霧氷の出現を待つ。夜、外は猛吹雪で、わずかに10ミクロンほどの超微粒子に吹きさらされた雪が、過冷却水滴となって舞い飛び、ブナの森にぶつかって凍結する。する

と、みるみるうちに白く不透明な氷塊がブナの幹や枝を覆いつくし、怪しげな霧氷の森を出現させる。
その幽玄な森を、時おり弱い風が吹き抜ける。霧氷の枝がぶつかりあって、かさかさと物悲しげな音を出し合う。



酒田凧保存会の 酒田凧

風に負けないよう作りを丈夫に
風が弱くてもよく揚がるように
昔からの知恵が詰まった
風のまちの酒田凧

お雛さまや古伊万里などに始まり、方言や食といった文化まで、さまざまなものが北前船でもたらされた庄内地方。力強くおめでたい絵柄と鮮やかな色彩のこの「酒田凧」もそのひとつだ。

もとは西から来た凧絵をもとに、女竹を扱う左官職人が冬の手仕事として作り始めた。次第に酒田らしい凧を作るようになり、絵柄も100種類を超すまでに。中でもとりわけ珍しいのが右の「ひと凧」だ。全身が描かれているのは全国でも酒田だけだという。他にも亀ヶ崎城があったことに由来する「亀凧」や市民になじみ深い魚「カスベ（カレイ）凧」といった酒田らしいものもあり、かつてはブンブン凧（角凧）が空に揚がると、酒田に春が来たと言われていた。

しかし、これらの凧が上空を賑わしたのは戦前まで。その後、酒田凧で遊ぶ風習がすっかり消えていた昭和50年、酒田凧の復活に向けて酒田凧保存会が発足した。初代会長は故加藤勇吉氏。保存会は以後、市内の旧家などから出てきた下絵を収集して復元に努め、今に至るまで後継者育成や凧揚げ遊びの普及に努めている。

ところで、その保存会の活動のひとつに凧揚げ大会の運営があり、毎年3月の開催日には全国から100名を超す参加者が集まるという。保存会の人たちも、全国各地の凧揚げ大会に酒田凧を持って赴いては、凧を愛する人たちと熱い交流を重ねているそうだ。知られざる凧の世界。そんな話を聞いていたら、久しぶりに童心に戻って凧揚げを試みたくなってきた。もちろん凧は酒田凧、揚げるのは庄内名物・地吹雪の日を避けて。



酒田凧の材料は女竹と楮（こうぞ）紙と凧糸。色は染料で塗ります。「ポスターカラーだと上さ揚げた時に黒く見えてしまっの」と現会長の松田正美さん。保存会のメンバーは現在13名で、要請があれば学校などで酒田凧づくり教室も開催。左の「亀凧」「だるま凧」「武者凧」は酒田夢の倶楽にて販売しています。「ひと凧」の購入希望者は保存会に直接ご相談ください。
酒田凧保存会 ☎0234-23-0868（松田）



山茶花

庄内俳句紀行

冬麗の 旧鐙屋を歩く

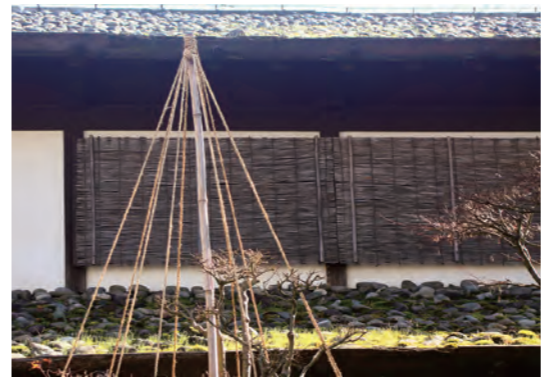
突然大きな閃光の稲妻と
空一面を裂くように轟く雷の音。
この鯉起しがいいよよ冬の訪れを
告げると庄内では雪催いの日が続く。

季語
冬麗
(とうれい・ふゆうらら)
冬日和、冬晴。冬の
晴れた麗らかな日。

長い冬を目前に控えた蒼穹の朝、冠雪したばかりの鳥海山や、田んぼで落ち穂拾いをする白鳥は、その白さをさらに鮮やかにする。酒田市役所の向かいにある旧鐙屋の白壁も、いつもよりその白さを増していた。

鳥海山をお国自慢に冬ごもり
—上村占魚

旧鐙屋は、酒田を代表する廻船問屋で、酒田三十六人衆として町政にも参画し、江戸時代の日本海海運の大きな役割を担っていた。三十六人衆とは、港町酒田を自由都市へと発展に導いた自治組織である。国指定史跡となっている家屋は、弘化2（1845）年の大火の直後に再建されたものといわれ、当時の庄内地方で広く用いられていた「石置杉皮葺屋根」の典型的な町家造りである。



石置き屋根と古草

鐙屋の石屋根濡らす寒の雨
—阿部月山子

鐙の絵が染め抜かれた暖簾をくぐると、帳場で番頭さんが出迎える。町家造りの特徴の「通り庭」には、冬麗の優しい光が差し込んでいた。十間余りの座敷、板の間が並び、その奥に台所がある。大きな竈からも多くの客人や使用人に振る舞われた様子がうかがえる。当時の繁栄ぶりは、井原西鶴の『日本永代蔵』にも記されている。今でもその賑わいが聞こえてくるようだ。

雪中の松よりも縄香りけり
—能村登四郎

庭に張られたばかりの雪吊りが、まだ縄の香りを纏っている。足元に残る寂しげな枯菊とは対照的に、色鮮やかな山茶花が優しく咲いていた。青空に石置き屋根の古草が眩しく光り、塀の上では雀が遊ぶ。時が過ぎても光や風は変わらぬ姿のまま、その普遍の中に佇めば、現在と過去との時空の旅人になれる、そんな光風の庭がここにはある。



鐙屋暖簾

古井戸に山茶花の光落としけり
—あべ小萩

かつて酒田には、旧家の板塀に歴史絵などを染め抜いた大きな布絵を張り出す「塞道の幕見」という小正月行事があった。多くの人々が連れ立って見物し、屋台なども出て、街はとても賑わったという。旧鐙屋では毎年この時期になると、各町で保存されている「塞道幕」を展示している。

時代の変遷の中でも変わらぬものを見る、廻船問屋の名残。その佇まいに、古人との時間を共有できるのかもしれない。



台所



通り庭の光

写真・文：あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）
◆旧鐙屋 酒田市中町1-14-20